渡辺保男との遭遇

安　積　仰　也
（社会科学研究所長）

人間は一生のうちに一体何人の人間と遭遇するのだろう。何人と視線を交わし，話をし，友人となり，また何人に死を惜しまれるのだろう。

1992年1月30日，渡辺保男先生は入院先の東京大学病院で65歳の人生を閉じられた。2期8年の学長職の任期をあと2か月で全うされるという時点での，無念のご逝去だった。渡辺先生が65年間の人生の中で何人と握手をし，食事を共にし，何人の人に愛されたのか，ぼくは知らない。知っているのは，学長としての8年間だけで数千人の卒業生と握手し，ICUでの26年間だけで多数の優れた研究者・実務家を育てられたこと，そしてこの度，先生の同僚・友人・子弟たちが先生の業績と人生を再確認し，先生を想いながら，論文とエッセーを書いたことだ。

ここに渡辺保男学長追悼号が日の目を見ることになった。先生のご逝去は辛いことだったが，記念のこの一冊の刊行はまことに慶ばしい。きわめて限られた人のみが追悼号や，古稀(退職)記念号や，欧米のフェストシュリフトの焦点となる。渡辺先生はそうした特別な人だった。

渡辺先生は人生の最後の4半世紀を本大学で過ごされ，そのうち6年間を大学院行政学研究科の科長，3年間を大学院部長，そして残る8年間を学長として生きられた。他方その間，日本行政学会理事，国際行政学会副会長など学術組織の要職，および第2次臨時行政調査会専門委員，人事院参与，文部省大学設置審議会委員，鎌倉雪ノ下教会長老職など，数多くの公的役職を務められた。一体先生が学内で何人の学生と教職員に影響を与え，また学外で何人の人々と交流されたのか，ぼくにはおよそ察し難い。

先生は行政学という比較的新しい分野を専攻され，主として政府機関とそ

こに勤める公務員の人事管理を焦点として研究を続けられた。同時に，都市行政・地方自治への関心も深められ，「三鷹まちづくり研究会」のようなユニークな制度的遺産を残された。数多い著作から先生の学者としての関心と努力とがうかがわれる。

生き残ったわれわれは，もはや先生のあのあたたかい笑顔に接することはできない。だが，先生の残された数々の出版物を通して先生とのふれ合いを続けることはできる。かつて先生と会ったことがない人も先生と遭遇できる。また，本追悼号に寄せられた論文とエッセーから先生の知られざる一面，隠された横顔も明らかになってくる。

かくして渡辺保男との遭遇者はこれからも増え，その交流もさらに深まっていく。